

学習者を取りまく状況の変化と、その中で大切にしたいもの

吉岡 和男

—

○銀河系を含む宇宙全体は、膨張し続けているという。そのイメージを、風船を膨らませるときの表面のようすにたとえて説明してもらったことがある。おおよそのところ、一定のバランスを保ったそれぞれの銀河は、互いに遠ざかっていき、宇宙全体の質量とその広がりとのバランスがとれたところで、今度は加速度的に収縮しはじめるのだそうだ。

学習者を取りまく状況の変化は、膨らみ続ける風船の表面に似ている。膨大な情報量とその増加は、表面積の増え続ける風船のようである。人と人との距離は、表面積の増加と比例して遠くなり、関係は疎になりがちである。しかも社会は膨らみ続ける表面に対応する能力を持つことと、表面に表れる結果をもって人をはかるうとする。人のアイデンティティーを裏付ける「奥行き」の部分は、世の中に順応すればするほど切られ、置き去りにされていく。

○言葉は、コミュニケーションの手段のひとつである。疎になりがちな人と人との距離を近づけ、そこに信頼関係を築いていくた

めに重要な役割を果たさなければならぬ。

しかし今、言葉における「奥行き」もまた、急速に失われつつあるように思えてならない。生活環境の変化、とりわけ「遊び」の変化などを背景とする、「言葉を裏付ける体験」の質的变化が、言葉を形式化、形骸化させていると思われ、さらにこのことが、人と人との信頼関係で結びあう手段としての言葉の機能を低下させていると思われる。この、「言葉を裏付ける体験」の質的变化は、概していわゆるバーチャル化の方向であり、言葉から実感を削ぎ取り、言葉を符号化させる変化である。

○また、コミュニケーション手段の多様化も、人と人とのつながりようを変化させている。携帯電話やインターネットの普及は、コミュニケーションのパーソナル化や軽便化をもたらしていると同時に、ごく限られた範囲にだけ開いて他は固く閉ざすという人間関係の結び方を生じさせたり、自分の都合にあう人間関係ばかりを求め、うまく伝わらないことへの耐性を培うことや、そこからさらに深い次元で人間関係を結ぶことをできにくくしたりしている。

○近年、生徒たちの人間関係が次第に希薄になってきているとい

う印象が、私にはある。それぞれの「奥行き」の部分に到達しない、表面的で底の浅い関係が多く見られ、悩みやトラブルに対処してきわめておろく、他者に心を聞くことを恐れる傾向も強まっていると感じている。人間関係の希薄化は、他者とのあいだに信頼関係を築くことを困難にし、人間を不安に陥れる。このことがまた、人間関係をさらに希薄化させ、人間不信を増幅させる。

このような、言語生活のもつと底の方に潜むと思われる不安感や人間不信などの問題に、言語生活の次元からどう切り込むか、言いかえれば、置き去りにされがちな「奥行き」の部分、明確に認識し、自らのアイデンティティーの核として位置づける営みを、言葉の学習をとおしてどのように保障していくかということが、今、私たちに問われているような気がする。

二

○昨春秋におこなった、コミュニケーションの目的と方法、他者への信頼度、子どものころの遊びなどについてのアンケート結果（二校・約半数の生徒に実施）から、少しひろい出してみた。

（次ページ 資料①）

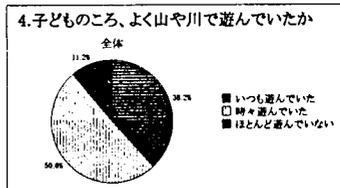
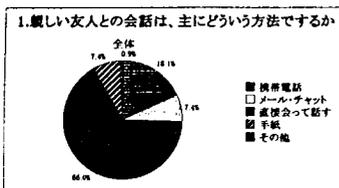
A校も本校も、中国山地沿いの自然環境に恵まれた場所にある。ひとことでは、田舎の学校である。生徒たちの多くが、山や川で遊び、近所のおじさんやおばさんに声をかけてもらいながら育ってきているはずであった。しかし、近年になって、山や川は遠くからただ眺めるだけのものであったり、大人たちは子どもに

対して無関心を装うようになったりというように、田舎特有の好ましい子育て環境にも変化が現れている。たとえば、「子どものころ、よく山や川で遊んでいたか」という問いに対して、「いつも遊んでいた」という回答は、約四割である。都会の高校生の実態からすれば、夢のような数字かもしれないが、それでも私は、ゆゆしき事象だと考えている。それは、自然が私たちに働きかけ、与えてくれるものの大きさ——無数の現象のバリエーション、人間のすべての感覚に働きかける総合性など——の、他に比類がないことを思うからである。

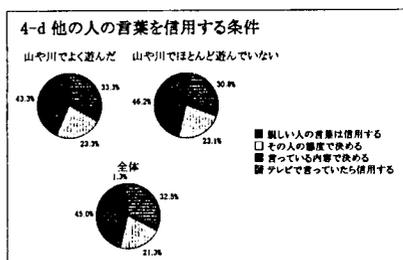
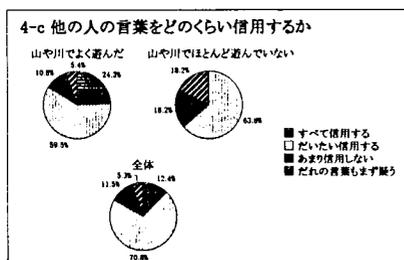
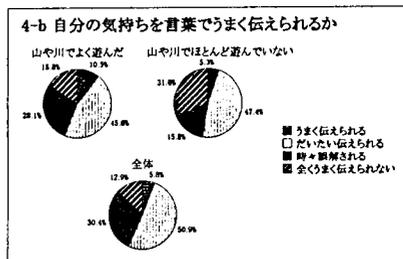
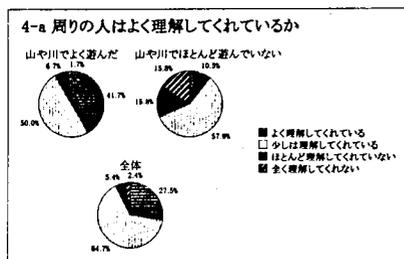
○かのヘレンケラー女史が、言葉を学びはじめて間もなく、ポンプ小屋で「水」を認識する場面は、劇的な瞬間として語り伝えられている。視覚と聴覚を奪われた中で、体験と言語とを突きあわせていくことが至難の業であることは言うまでもないが、だからこそ、触覚や嗅覚や、過去の記憶などにも働きかけるような、体験における一瞬一瞬の情報量の大きさと広がり、認識をより確かなものとし、同時に、認識のラベルとして貼られた言語を、より豊かなものとして意味づける作用をしたのではないかと、私は想像している。

○資料①によれば、「子どものころの遊びの内容とコミュニケーションとの相関」で、4aと4cのグラフから、「山や川でよく遊んだ」と回答した生徒の、周りの人への信頼度はかなり高く、「山や川でほとんど遊んでいない」と回答した生徒との差が、かなり歴然と読みとれる。サンプル数が少ないので、この結果をもつて一般的な傾向といえることはできないが、少なくとも、本校では

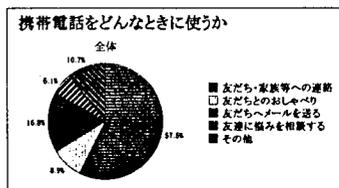
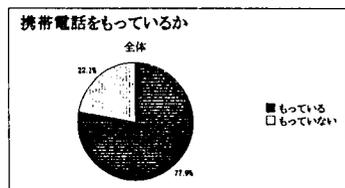
本校・A高校「コミュニケーションについてのアンケート」より



子どものころの遊びの内容とコミュニケーションとの相関



参考 A高校「携帯電話についてのアンケート」より



注目しておかなければならないことだと思ふ。

○次に、コミュニケーションの手段を見ると、「特に親しい友人との会話の主な方法」として、「直接会って話す」が三分の二を占めるのに対して、「携帯電話」や「eメール・チャット」も三割近くを占めている。

情報量に視点を置いて考えると、メールは文字だけによる伝達手段であり、伝わる情報量は少ない。相手のメールアドレスや携帯電話の番号を知るだけで簡単に「会話」ができるし、聞きにくいこともクールに言える半面、どのようでも嘘をつくことができる。受ける方は信じるしかない。出会いのきっかけにはなつても、それだけで信頼関係を構築するのはかなり困難である。

携帯電話は、リアルタイムの音声による伝達手段である。周囲の音をよく拾うことや、声のニュアンスがある程度伝わることから、メールよりは情報量が多くなる。だが、嘘の入り込む余地もかなりある。

直接会って話す方法は、伝わる情報量が飛躍的に多くなる。あらゆる感覚を駆使して伝え、受けとめることが出来る。したがって嘘の入り込む余地は、メールや携帯電話に比べればかなり少なくなり、伝わりやすくなる半面、自分の都合にあわせて関係を切ることはできないから、いやなこと、耐えなければならぬようなことも多くなる。だからこそ、相手に自分の思いがうまく伝わったとき分かち合える喜びは大きく、また同時に、うまく伝わらないことへの耐性も培われる。そしてさらに、うまく伝わらないことをベースにして、悩み、深く考えることを余儀なくされて、よ

り広く、あるいはまた、より深い次元でつながることが可能となる。このように、より深いところで信頼関係を築いていくためには、やはり、情報量の多いリアルタイムの出会いが不可欠である。○出会いの様式や方法の次に、出会う姿勢、出会うとする意思の問題もある。自分の周りにあるすべてのもの、ありとあらゆる現象からなるべく多くの情報を感じ取ろうとして、きちんと向き合う体験を重ね、それらを包括し、象徴することばを、自分の中に探す営みを通して、認識をより確かなものとしていくことは、きわめて大切なことである。

すなわち、それは自分自身の感性に一本一本襷をつけていくようなものである。周りにあるすべての現象が、つけるべき襷の形を示してくれている。だが襷をつけるのは、あくまで自分自身である。出会うとする意思をもって、しっかりと出会うこと。そのことがより深く繊細な襷の模様を形成してくれる。

多くの出会いによって、あらゆる角度から自分自身の感性の襷が深く繊細に形成されたとき、出会ったものからさらに多くの情報を得ることができるようになり、認識はさらに深まっていく。そして、自分の感性の襷の深さだけ深いところで、人と、すべてのもので出会うことができるだろう。さらに、自分と異なる多くの人々が存在していることの意味が分かるだろう。世の中に多くのもものが現象していることの豊かさも分かるだろう。これが出会いのもたらす醍醐味となり、それぞれの人生を至福へと導くことであろう。

○このようなことをあれこれと考えながら試みてきたのが、「言葉のスケッチ」である。「言葉のスケッチ」によって得られると思われるものとして、次のようなことがあげられる。①自分の周りにおける人やものに対して「通り過ぎる関係」「すれ違う関係」から「出会う関係」へと深まっていく。また、この過程で感性が磨かれていく。②出会ったものを自分の言葉に置き換えるときに、そのものへの認識が深められる。それは同時に、そのものの自分自身にとつての意味づけでもあり、自己への認識の深まりでもある。③生徒それぞれの個性が見事に發揮される。多くのそれぞれに違う人が集まること、どれほど豊かなことであるかを実感できる。

次に取り組みの概略と、実際にスケッチされたものを紹介する。

晩秋になると、校門のあたりは枯れ葉に埋めつくされる。微かな風にかサカサと音をたてている。

ふと気まぐれに、足下にあるのを一枚、手にとつてみた。くるりと丸まった葉を両手で開くと、赤や黄、茶色に虫食いの黒、そしてまだ残っている緑など、地図のような模様があつて、実に美しい。思わずもう一枚拾つて内側を見ると、さつきとは全くちがう味わいの色模様である。

つい夢中になつて、片っ端から拾い上げては確かめる。どれひとつとして同じものはない。しかも驚くばかりの美しさだ。

無造作にくるりと丸まって、いかにもつまらないもののように見えている枯れ葉たちは、こんなにも慎ましく、それぞれの生のドラマを内に秘めて、そこにひしめいていたのだった。

◇ ◇ ◇

授業で「言葉のスケッチ」をはじめたのは、六年ほど前のことである。「桜」「窓の外」「音」など、季節や天候に応じて題と場所を決める。B4一枚のプリントに、簡潔書きでも文章でも良い。書かれたものは、相互に批評したり、詩に発展させたりしている。

中でも生徒のノリがいいのは、オノマトペづくりである。一枚の紙を両手で揺する音、黒板を拭く音、外から聞こえる鳥のさえずり、車の通る音、煙のたなびき。素材はいくらでもある。

じつと見つめる、耳を澄まして聴く、嗅ぐ、味わう、身体で感じるなど、自分自身のあらゆる感覚を研ぎ澄ましてしっかり感じ取り、表現することは、自己の存在確認の原点であり、本質的な充足感を伴うものようである。

◇ ◇ ◇

「言葉のスケッチ」を通して、平凡な日常の中に新たな発見をしていくことは、出会いそのもののもつ大きな歓びに、外に出かける解放感も手伝って、なかなか好評である。パソコンを用いての作文とはまたちがった角度から、生徒の意欲を喚起するものとなっている。

「言葉のスケッチ」抄

七月八日 テーマ「音」(二〇分間音を聞き続けて書く)

(めぐみ)

外でスズメが鳴いている。たぶん二羽くらい。その鳴き声がかすかに聞こえる。お向かいの校舎では、メガネをかけた先生の声が聞こえる。「二番。父への……」。ここまで聞こえるほどの声で言わんでもいいのに。

道路では、仕事をしている人たちのトラックの音が聞こえる。忙しいのか知らないが、音が急いでいるようだ。

風で掲示板のプリントが音をたてている。ちゃんと画びょうでとめてあるのは音をたてることはない。

工事の音が聞こえる。近くで工事をしているのかな。「ゴツン」みたいな感じの音がした。「暑いのに仕事ご苦労さま」と言っているの？それとも、「オレをつり下げるな」とでも言っているのでしょうか。

カギの音がする。お向かいの校舎の一階だ。たぶん、カギとカギがぶつかった音。お金がチャリンチャリンいつているような音。お金の音には敏感な私。だからこの音も聞こえたのかも。

最後に、私が字を書いているシャーペンの音。書くときに机にあたって音がする。私が急いで書いているので、この音も速い。私が遅く書くとき。この音は自分で作っている音だから、自分で自由自在にあやつれる。

(T)

授業をしている声が聞こえる。女の先生の、力のこもったとがった声。幾分か疎になったり、密になったり、向かいの校舎から流れてくる。少し離れている割には、存在感がある。なぜだろう。

風が窓をゆらす音。ゴトゴトと、吹かれるままに仕方なく音をたてている。

時折、道のほうから車の音。

ゴーツという、遠くから飛行機の爆音のような音が、間断なく低く響いている。川向こうの工場の出す音か。

教室の中からは、ささやくような話し声。シャーペンを走らせる音。鶏が餌をついばんでいるようなリズムだ。

スリッパの音。ざわめき。笑い声。遠くの音は、風に乗って流れてくる。

カラスの鳴き声が聞こえる。他の音とは違って、とても鮮明な、心に直接入ってくる音だ。

スズの音。高く澄んだ音が、よどんだ空間に響き渡る。

七月十日 テーマ「音」(二〇分間音を聞き続けて書く)

(ようこ)

まず、私の耳に入ってくる音は、外で工事をしている機械の音だ。私が今聞いている音の中で一番大きい。

それから聞こえてくるのは、セミの鳴き声だ。夏になるといつの間にか聞こえてくる。春のカエルと同じような感じだ。静かに聞いていると、他のクラスで授業をしている先生の声、話をしている生徒の声が聞こえる。いろいろな声が聞こえる。

外を眺めていると、時々私の横を飛んでいくスズメがチュンチュンと鳴く。

今の私の耳にはそれくらい音しか聞こえない。もつとたくさんの音が本当は聞こえるのに、私はいつも、その音を聞くとはしていない。

(みほ)

- ・外から工事をしている音がする。
- ・セミの声がうるさい。夏だ！と思う。
- ・隣の教室から、I先生の声がする。保健の授業をしているらしい。
- ・風で、うしろにはつてある紙が、バサバサめくれている。強い風が吹いているのかと思う。
- ・シャーペンを机に置く音がする。もう終わったのか？字を書くときの音もする。
- ・図書室のドアを閉める音が聞こえた。見たら人が出てきていた。
- ・パタパタとスリッパの音がする。
- ・いすをひく音がする。うるさい。

・廊下をA先生が歩く音がする。見ただけで大嫌いな英語を思い出す。

・鳥が鳴く声が聞こえる。のどか。

(やすひろ)

ジーーとせみが鳴いている。とてつもなく長く。よくもつもんだ。このジーーだけでは何ゼミか分からない。自然科学部ながら情けない。ミーンミンミンも、シャワシャワも、オーシーツクツクオーシーも、他のセミもまだ。しかしまあ、本にはミーとかジーとかと解説してあるが、人によって聞こえぐあいが違う。何が基準なんだか……。

工事をしている。どうも表現しにくい。いろいろな音が入れ替わったり途切れたり。工事的には？その秘密を調べて何とするといわれても、答えようもない。

車の往來の音。たまにひととき大きな音をたてて大型の車が通る。運転手がA型でもオオガタとはこれ如何に。道が細くて両側が家で、結構ほこりっぽい。

特によく聞こえるのは、やつぱり人のたてている音。普段から聞こえているので、一番耳慣れているという感じ。ガタングトンと、いすやら机やら。ワイワイガヤガヤ、ペチャクチャと。絶対にこは聞こえないのに、なぜか頭ではこう感じる。

思いっきり耳を澄ましてみると、今度はものすごい音がする。地軸を中心に、ものすごい勢いで地球が回っている。も

のすぐくうるさい。もう、ものすごく。みんなうるさくないのか。夜も眠れない。ものすごい音で。この。

雲の記憶なんてものを聞くと、出生地や現住所、性格などでいろいろと違ってくる。これが案外ためになる。

山を見る。森の音が聞こえるような気もする。聞こえるというか、分かる。針葉樹、広葉樹、照葉樹で違う。雰囲気が聞こえてくる。

(T)

パワーショベルのうなりが聞こえる。重くなったり、軽快になつたり、音の質が変化して、土に潜り、空中に頭を振り回す動きが伝わってくる。何本もの操作棒を巧みに操りながら、じつとショベルを見つめているオジサンのかめかみに、ヘルメットの隙間から汗が伝っていることだろう。

廊下を歩くスリッパの音。パタパタ音をたてて颯爽と歩いていく。N先生だ。

ドアの閉まる、金属質の重い音。O先生が音もなく歩いて行かれた。

隣のクラスから、机を引きずる音。あまり好きな音ではない。教室の中からは、数人がひそひそと話す声。はじめは二人、三人だったが、少しずつ膨らんでくる。

道路のほうから車の音。近づいたかと思うと、すぐに通り過ぎていった。

またパタパタと廊下を歩く音。テンポは快活だが、少し重

量感がある。A先生だ。

相変わらず中庭からはショベルカーのエンジン音。耳の底にずつと居座っていて、遠くの澄んだ音が聞こえてこない。

七月八日 テーマ「窓の外」(教室から窓の外を眺めて書く十五分間)

(しょうた)

窓の外では、一年生がソフトボールをしている。とても大きな子がライトを守っている。グラウンドはとても暑そうだ。一年生は元気がいい。一生懸命走っている。テニスコートは草でいっぱいだ。ネットもちぎれている。テニス部は一体何をしているのだろう。

今日の空は、薄く雲がはっている。なかなかの天気だ。風も吹いている。今日もいい一日になりそうだ。

(さゆり)

私の左側にある窓の外を見ると、まずはじめに、山が目にはいる。遠くだけど、すぐ近くに感じる。深緑、黄緑、緑のきれいな山だ。

私と山との間にあるグラウンドでは、男子がソフトをしている。雲のかかった空の下で。トンボもたくさん飛んでいる。スズメが二羽飛んでいる。気持ちのいい風が吹いてきて、煙

突の煙が流され、ゆれている。

何件か家が散らばっていて、その家の屋根は、太陽の光で反射してまぶしい。ほとんど黒い屋根だ。その隣には日伝医院がある。

十本くらい木がある。夏だから桜の木は緑の葉でいっぱい。

(けんじ)

窓の外には、中国山地の山々が広がり、東城の町並みが輝いている。木には蟬が鳴き、夏を象徴している。空を見上げれば、まぶしい太陽が照りつけ、「今日も暑いですよー」と語りかけているようだ。ふと建物を見てみると、煙突があつて、大魔人が出てくるような煙を噴きだしている。

(T)

窓の外からは、涼しい風が吹いてくる。目の前に、砂漠のように広がるグランドの光景からは、想像もできないほどの心地よさだ。

この風は、その向こうの山並みから吹いてくるのだろうか。木陰にいるような、やすらいだ気持ちにさせてくれる。

グランドと山との間に挟まれて、家々の屋根が重なり合っている。一本の高い煙突から白い煙が立ちのぼっていて、風が吹くたびに左右に揺れて、まるで生き物のように形を変える。灼熱のグランドでは、授業でソフトボールをしている。こうして遠くから眺めていると、人の姿がちっぼけに見える。

だがよく見ると、それぞれが中腰に構えて、強烈なグランドの照り返しを、懸命にこらえているようである。

ああ、もう昼時だ。

気持ちのよい風が、私の魂を運んでいく。

四

○昨今の学習者を取りまく状況の変化は、基本的に決して好ましい方向への変化ではないと、私は思っている。自然や人間との出会いの機会が減り、様式が変わって、言葉を裏付ける体験が痩せてきている。人間関係は次第に希薄になり、人間不信は増幅されつつあるように思われる。「言葉のスケッチ」の試みは、そのような状況の変化に対するひとつの抗いのつもりである。今とはとにかくしっかりと感じ取り、書かせることに力点を置いているが、この試みを通して、生徒たちが自分の周りにあるすべてのものと同じくりと出会ってくれることを、心から願っている。

○理屈が多い割には実践はまだまだ不十分であると自覚している。だが世の中には、状況がいくら変化しても失ってはならないもの、あるいは状況の変化に動じないものがあるとも思っている。何年実践を重ねても、相変わらず拙いことだと自分に呆れながら、このような機会を与えてくださったことに、心より感謝を申し上げます。

(広島県立東城高等学校)